

無垢である

陽羅 義光

ひところ、もしかすると一昔前、あるいは誰も知らない時代、「無垢な少年少女」が、真善美の象徴だった。

無垢とは文字通り、手垢のついていない人間、性善説に従うとしたなら、生まれながらの真のもの、善いもの、美しいものを、永遠に持ち続ける人間。

だから、いくら歳をとっても、「無垢な少年少女」の魂を持ち続けるならば、そういう人間はある種の偶像になりうる。

ドストエフスキー作品に関する、島田雅彦の言葉がある。

【無垢であることは恐ろしいことなんです。特に権力者にとっては、無垢であること、またその無垢である者が人々に愛されるということが一番恐ろしい】

【一切抵抗しない女、おとなしい女を扱いやすいなどと思ったら大間違いで、何もいわないことで相手の男は無意識まで見透かされたような気持ちになり、はなはだ居心地が悪くなる。ラスコーリニコフにとってのソーニャがそういうタイプの女で、あのラスコーリニコフも、最後までおとなしく自分を見詰めている、一見無抵抗に見えるソーニャに屈してしまう。あのおとなしい女の眼差しに耐えきれなくなるわけですよね】

権力や武力や圧力に対抗するに、暴力や理屈や反抗で対抗するが、それよりも「無垢である」ことのほうが、対抗者として存在感を示しやすいかもしれない。

だが「無垢である」ことが、尊敬され、愛慕され、信頼されるのかというと、どうもそんな時代ではない気がする。

「真善美」なる言葉が時代遅れの感があるのと同時に、「無垢」なる言葉も時代遅れの感がある。

もちろん、時代遅れは非難されるべき要素ではない。

理解されにくい要素である。

「無垢」な人間は、世間にとって、理解不能な人間である。

さらに、「無垢」な人間は、大多数の一般の人間（無垢でない人間）の憧れの存在ですらない。

「私は真実である」と発言して西暦992年に磔刑になった、フセイン・アル・ハラージの言葉。

【崇高なる神よ、私は知っている。あなたは純白だ。そして私は言いたい。あなたは人の讃美する、すべての讃美にも染まらない。人の礼讃する、すべての礼讃にも染まらない。人の思惟する、すべての思惟にも染まらない。】

「純白」とはむろん「無垢」である。

「無垢」とはかほどに孤独であり、従ってかほどに理解されない。

理解したと信じている一部の「無垢」信者は、理解したと誤解しているにすぎない。

無垢でない人間が、無垢な人間を憧れるなぞという立派な社会は、世界中どこにもないのである。